

『経済学史研究』執筆要綱 (2021年10月)

以下の要綱は、シカゴ・マニュアル (Chicago Manual of Style, 15th ed.) を参考にしつつ、従来の『経済学史研究』のスタイルを引き継いで、一層の明確化をはかったものです。『経済学史研究』への投稿をお考えの方は、この要綱に従っての投稿をお願いいたします。

(1) 数 字

① 原則としてアラビア数字を使用。

第1章、第1節、第1巻、第1に、1箇所、第1論文、1つ、第1次世界大戦

② 論文の節分割は、ローマ数字 (I, II, III, IV, ...) で行い、見出しを添える。さらに区分する場合は、アラビア数字のピリオド添え (1., 2., 3., ...) とする。

(2) 句読点

句読点は「 , 」, 「 . 」 (カンマとピリオド) で統一する。

(3) 人 名

欧米人名の日本語表記 (カタカナ) については、経済学史学会編『経済思想史辞典』 (丸善) に記載されている場合は、原則としてそれに従う。記載例は、下記を参照。

ミル (John Stuart Mill, 1806-73)

K. E. ボールディング, ケネス・ボールディング

(ケネス・E. ボールディングという形は避ける)

(4) 図 表

図表は別ファイルに作成し、本文の該当箇所に [ここに図 1 (または表 1) を挿入] と指示しておく。当該図表の下に「表 1 1920 年代の失業率」などと短い題 (caption) をつけておく。

(5) 注

注は「脚注」とする。注番号は、1), 2), 3), ...などと振り、「上添え字、片パーレン (丸括弧), 半角」とする。なお、単なる典拠注は、本文の中に入れる (次の項目を参照)。

(6) 引 用

原典の省略は「...」 (三点中黒, 1字分) で示し、欧文での途中省略は「...」 (ピリオド3つ) を、末尾の省略は「....」 (ピリオド4つ) を用いる。引用者による挿入・改変の断り書き等は、「 [] 」

(角形括弧，全角)で示す。独立した長い引用の場合は，前後を1行あきとし，全体を1字下げ，末尾に出典を明記する。欧文書籍の巻数や章を示す場合は，vol. 1 や chaps. 1-2 のように，volume や chapter は省略形で示し，小文字を用いる。以下，具体例を示す。

ここでのマルサスの主張について，羽鳥・中村(2000, 104)は，「...合計価値額が減少したために，労働需要が減少した」と解釈する。

Winch (1987, 105, 107/訳 108, 110)によれば，マルサスは...

(/は，ファイル上は全角を使用しておく)

「われわれの計画は...逃れさせるようなものではない」(Beveridge 1942, 170-71)

「為政者がいかなる場合でも手形を平価で与え」(Steuart [1767] 1995 [以下，Worksと略記]，vol. 3, 461) ることになる。

なお，本文や注の中で同一文献を引用するときには，「ibid.」「op. cit.」「同上」「前出」等は用いない。ただし，繰り返し引用する場合は，略記号を用いてもよい。この場合，参考文献表の当該文献の末尾にそのことを明記する。

例 Keynes, General Theory, 23-25 → Keynes, GT, 23-25

(7) 強調

日本語論文では，原則として，アンダーラインではなく圏点(・・・)を用いる。

(8) カタカナ表記における中点の使い方

原綴で word が切れる箇所には，原則として「・」(中点)を入れる。

ポリティカルエコノミー → ポリティカル・エコノミー
ハイフン付きの word は，one word として扱う。

(9) 参考文献表

参考文献表は，本文の末尾に置く。洋書は著者名(姓)のABC順，和書は著者名(姓)の五十音順で分けて並べる。同一著者で同一年に複数ある場合は，年号の後ろに a, b, c, ... をつけて区別する。欧文雑誌名や著作名(単行本扱いのもの)はイタリック(できればアンダーライン付き)で示しておく。詳細は以下の通り。

- ① 著者名・編者名：3人までは全員の名前を表記。それ以上の場合は，外国語文献の場合は「et al. (立体)」を使用し(et al. の前にカンマは不要)，「and others」は用いない。日本語文献の場合は「他」を使用する。

- ② 日本語論文の副題には、左側のみ「―」（全角ダッシュ）を使用し、右側にはつけない。外国語論文の副題には「:」（コロン）を使用し、コロンの次の単語は、冠詞であっても大文字とする。
- ③ 英米の雑誌名には、冒頭の冠詞（The）をつけない。
- ④ 版の表示は、2nd ed., 3rd ed. のように表記。（second edition, Second Edition, ... は使わない）
- ⑤ 巻・号数がある場合は、18 (3): 80-101, 号数と頁のみの場合は、(3): 10-20 のように示す。
- ⑥ 出版社名では、日本の場合、書房や書店は記載するが、株式会社等は省く。英米出版社名では、Co., Ltd. や Book Company は省略するが、Publishers や Press は表記。冒頭の冠詞（The）は省く。原則として&（アンパサンド）は使用しない。

Clarendon Press John Wiley and Sons

Kluwer Academic Publishers McGraw-Hill

Macmillan MIT Press

Springer-Verlag

岩波書店

勁草書房

社会評論社

- ⑦ 出版地は、原則として都市名のみでの記載とする。ただし、州都ではない都市や町の場合は、州名（国名）等を添える。Cambridge のように英米ともにある都市の場合は注意。

Basingstoke, Hants: Palgrave Macmillan

Boston: Kluwer Academic Publishers

Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Cambridge, MA: Harvard University Press

Cheltenham and Northampton: Edward Elgar

Chicago and London: University of Chicago Press

London: George Allen and Unwin

München: C. H. Beck

New York: Oxford University Press Oxford: Clarendon Press Paris: Albin Michel

Paris: Presses Universitaires de France Princeton, NJ: Princeton University Press

Tübingen: J. C. B. Mohl

以下にさまざまな例を示す。

(A) 単行本

Bénoit, Francis-Paul. 2006. Aux origines du libéralisme et du capitalisme en France et en Angleterre. Paris : Éditions Dalloz.

Brentano, L. 1931. Mein Leben im Kampf um die soziale Entwicklung Deutschlands. Jena: E. Diederichs Verlag. 石坂昭雄・太田和宏・加来祥男訳『わが生涯とドイツの社会改革—1844-1931』ミネルヴァ書房, 2007.

Kregs, S. and L. Wenar, eds. 1994. Hayek on Hayek: An Autobiographic Dialog. Chicago: University of Chicago Press. 嶋津格訳『ハイエク, ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000.

Kurz, H. hrsg. Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie XXVII: Der Einfluss deutschsprachigen wirtschaftswissenschaftlichen Denkens in Japan. Berlin: Dunker & Humblot.

Meyssonier, Simone. 1989. La Balance et l'horloge: la genèse de la pensée libérale en France au XVIII^e siècle. Paris: Éditions de la Passion.

Mommsen, W. J. und W. Schwentker, hrsg. 1988. Max Weber und seine Zeitgenossen. Göttingen und Zürich: Vandenhoeck & Ruprecht. 鈴木広・米沢和彦・嘉目克彦監訳『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』ミネルヴァ書房, 1994.

植村博恭・磯谷明德・海老塚明. 2007. 『新版 社会経済システムの制度分析—マルクスとケインズを超えて』名古屋大学出版会.

・単行本の一部からの引用

Henderson, W. and W. J. Samuels. 2004. The Etiology of Adam Smith's Division of Labor: Alternative Accounts and Smith's Methodology Applied to them. In Essays on the History of Economics, ed. by W. J. Samuelson, K. D. Johnson, and M. Johnson. London and New York: Routledge, 8-89.

羽鳥卓也. 1976. 「『国富論』における生産的労働と蓄積ファンド」『国富論の成立』所収, 経済学史学会編, 岩波書店, 226-50.

・全集等の場合, 初出と異なる版, 略語付き

Steuart, J. [1767] 1995. An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy. 2 vols. In The Works, 6 vols. London: Routledge/Thoemmes Press. [Works]

(B) 雑誌論文の場合

- ・号数と頁のみのもの

羽鳥卓也. 1991. 「マルサスにおける農業主義と商工業主義」『マルサス学会年報』(1): 1-20.

- ・巻数, 号数および頁を記載のもの

Okada, M. 2011. Marx versus Walras on Labour Exchange. Kiezaigakusi Kenkyu (History of Economic Thought) 52 (2): 46-62. (『経済学史研究』の英語表記例)

Pullen, J. 1979. Malthus on the Doctrine of Proportions and the Concept of the Optimum. Austrian Economic Papers 21 (39): 134-54.

小峯 敦. 1995a. 「不確実性下の資産選択—現代金融論からの遡及」『一橋論叢』(一橋大学) 113 (6): 121-41. (大学紀要, 副題がある例)

(10) 英文要旨

英文要旨は, 日本語論文では頁を独立させ, 「参考文献表」の次に置く. 英文論文では, 論文本文の最初にAbstract の形で置く. 要旨の最後に JEL 分類番号を 3 つ以内で添えること.

(11) 謝 辞

日本語論文・英語論文とも, 謝辞は冒頭頁の脚注とする.

(12) 欧文論文執筆時の注意

- ① 綴りは, 英語綴りも米語綴りも可, ただし, どちらかに統一すること.
- ② 論文中のラテン語は, イタリック表記を原則とする (例: per se, sic).

(13) 書評執筆時の注意

- ① 書評における引用頁は, (105) (105-06) のように示す. (105頁) (105-06ページ) とはしない.
- ② 原則として2ページに収める. 初校で数行はみ出したときは, 「表現を変更する」, 「改行を減らす」等の処理で, 校正時に2頁以内に収める.